大田区自然観察路

学びながらぶらり散策

「海と埋立地のみち」の生物・植生

～大田区の臨海部～

大田区自然観察路「海と埋立地のみち」は、大田スタジアムに隣接するせせらぎの森（大井ふ頭中央海浜公園内）、東京港野鳥公園、平和の森公園、大森ふるさとの浜辺公園、昭和島、京浜島、そして京浜運河、海老取川に沿った臨海部のコースである。

この地域は、古来より遠浅で波静かな海面と豊富な海産資源により、江戸前の海産物供給地として栄えた。なかでも大森の海岸を中心とするアサクサノリの養殖は極めて盛んで質、量ともに全国的に有名であった。ところが、首都圏の高度経済成長に伴って、平和島、昭和島、京浜島、羽田空港などの広大な埋立地が造成され、往時の面影は全く見られなくなってしまった。埋立地には工場をはじめ、流通基地、海上公園、空港施設などが立地して発展を続け、大田区はもとより首都圏の重要な位置を占めている。近年、排水規制や下水道の整備により水質の改善は著しく、水際線には大規模な公園や緑道が整備されたため、運河を含めたこの地域の自然は回復しつつあり、新しい沿岸環境が創造されている。現在、ハゼ、ボラ、アユの稚魚等の魚類やアサリ、シジミ等の貝類が生息し、それをエサとする野鳥類も多く生息している。

「海と埋立地のみち」の観察ポイントは、広大な土地と海がつながる開放された空間であり、その特徴を活かした大森ふるさとの浜辺公園、東京港野鳥公園、京浜島つばさ公園などがある。また、それらをつなぐように緑道公園が整備されている。この地域は、魚介類や水鳥の生態系が豊かで、私たちのレクリエーション活動を共存させる貴重な空間となっている。

海岸線のうつりかわり

西は多摩川に接し、南に東京湾が広がる大田区は、水と深い関わりをもってきた。江戸時代から昭和初期まで、海、河川からの恵を糧として漁業、農業中心に生活してきた。しかし日本の工業化、国際化の進展で、京浜工業地帯の出現、羽田空港の建設、物流の拡充を目的に海岸線に劇的な変化がもたらされ、海岸風景が一変した。このように大田区の海岸線の変化によって生まれた「海と埋立地のみち」は、歴史、生活、そして自然の再発見ができるみちでもある。

（引用資料：平成22年3月 大田観光協会発行「大森羽田海岸線うつりかわり地図」）

海苔物語

（協力：山本海苔店）

東京湾においてノリヒビを用いたアサクサノリの養殖が本格化した時期は、おそらく享保年間（1716～36）であろうと推測されている。

海岸の農村の副業から効率的な農閑余業として発展してきたが、江戸時代には幕府の許可が必要で、現大田区内では大森村と蒲谷村に限られていた。漁業面積は江戸期に約27万坪であったが、明治に入って倍増。新たに羽田村が養殖に参入した。漁場が閉鎖される直前の昭和36年には約4万柵（坪数換算約120万坪）であった。生産数量は昭和31年に1億3千万枚であった。

東京湾のノリ生産量は、昭和初期まで全国1位で、第二次世界大戦後は4～5位であったが、昭和30年代になると漁場環境の悪化が進んだ。そして、昭和37年12月に東京湾の整備計画に応じて漁業権を放棄することとなり、300年にわたるノリ漁業に幕を閉じた。

現在、大田区には海苔漁業の歴史や当時の生産方法を身近に学ぶことができる「大森 海苔のふるさと館」がある。冬になると海苔つけ体験の教室も開催されている。

（引用資料：平成5年 大田区郷土博物館発行 「大田区 海苔物語」）

海と埋立地の樹木

埋立地の植生は、公園、街路樹等の植栽樹、芝草地、空地・埋立地の雑草地など人為的な植物群落となっている。特に耐潮性のあるマテバシイ、スダジイ、クスノキ、タブなどが公園、街路樹に多い。また、海岸沿いにクロマツも多い。

クスノキ
（クスノキ科・常緑高木）

防虫剤の原料「樟脳油（しょうのうゆ）」を含み、葉を傷つけるとにおう。海沿いに多く、寺や神社によく植栽される。樹高は20メートル以上になり、日本産常緑広葉樹では最も大型となる。小さな黄白色の花をつけ、球形の実は秋に黒熟する。アオスジアゲハ（幼虫）の食草でもある。大田区の木。

マテバシイ
（ブナ科・常緑高木）

九州、沖縄の海沿いに多い日本特産種。関東地方以南には古くから植栽されている。花は5月に咲き、実（どんぐり）は翌年の秋に成熟する。長楕円形のどんぐりは子どもの工作で人気がある。

クロマツ
（マツ科・常緑高木）

海沿いに多いのがクロマツで、山にはアカマツが多い。樹皮は灰黒色。雌雄同株だが、花は雌雄異なる。種子は開花した翌年の10～11月にかけて成熟する。防風や防砂のほか、工場緑化や荒廃地復旧などにも植栽される。

海と埋立地の野鳥

「海と埋立地のみち」には、水辺の鳥を中心に四季の変化に合わせて、夏鳥のコアジサシや冬鳥のカモ類、カモメ類などを各地で見ることができる。また、森ヶ崎の鼻（干潟）周辺では潮の変化に合わせて、野鳥の採餌や休息の様子などが観察できる。

ハヤブサ
（ハヤブサ科）

カラスくらいの大きさ。長い尾、鋭く尖った翼でスマート。カモやシギ・チドリ類がたくさん集まっているようなところへ飛んでくる。

モズ（モズ科）

スズメより大きい。オスは茶色の頭、白い眉、黒い目を通る線のコントラストが目立つ。体を垂直に立てた姿勢で木や枝の先にとまり、尾を回す。冬によくみられる。

シジュウカラ（シジュウカラ科）

スズメより少し小さく、胸にはネクタイのような黒帯がある。木から木へ移動し、餌のクモや毛虫などを探している。

イソシギ（シギ科）

ハトより小さいシギ。まっすぐなくちばし。腹の白が肩先に切れ込んでみえる。尻を上下に振り、チーリーリーと細くのばすように鳴く。

ササゴイ（サギ科）

ハトより大きい。黒いかんむり羽。顔にひげのような模様。夏鳥として飛来し、水辺で魚を採る。

キジバト（ハト科）

ドバトより少し小型。全体に薄い茶色で、翼にはウロコ模様。首には青い斑点がある。ほぼ全域で1年中、ごく普通にみられる。

大田区生まれのコアジサシがニュージランドなどでも見つかっているヨ！

コアジサシ（カモメ科）

ムクドリ大で翼や尾が長くスマート。黄色いくちばし、頭の黒が目立つ。空中でとまり、ダイビングして魚を採る。夏鳥として飛来し、森ヶ崎水再生センター屋上で繁殖をしている。

コガモ（カモ科）

ハトくらいの小型のカモ。オスは茶色の頭で目の周りが緑色。尻のクリーム色の三角が特徴。秋から春まで運河、東京港野鳥公園などで多数みられる。

カンムリカイツブリ
（カイツブリ科）

カラスくらいの大きさ。冬鳥として飛来し、首が長く白くみえる大きなカイツブリ。臨海部ではほかに、ほおから目の後ろにかけて白く、くちばしがやや上に反った感じのハジロカイツブリもみられる。

大田区自然観察路『海と埋立地のみち』の生物・植生

発　行／ 大田区環境清掃部環境計画課
編　集／（一社）地域パートナーシップ支援センター　　デザイン／松井由莉
写　真／ 大塚　豊、小野紀之、鈴木百合子
※このパンフレットは区民協働調査を基に、区内環境団体（おおた野外博物館、多摩川とびはぜ倶楽部）と協働で作成したものです。